

重雷装巡洋艦の一日は、退屈だ。

正確に言うなら、甲標的を持つていない重雷装巡洋艦の。

駆逐艦たちには遠征がある。戦艦や空母や重巡には最前線に立つという立派な仕事がある。軽巡や軽空母にだって、最前線のサポートから練度の低いものに経験を積ませる際の裏方としての働きまで活躍の幅は広い。

「大井っち、なんか面白い話してー」

「北上さん、それももう三回目ですよ」

だが自分たち雷巡……それも、甲標的を持たない雷巡にはこれといった普段の任務というものが無い。

練度の低い駆逐艦たちの訓練に付いていっても、自分たちのあまりに強力すぎる魚雷はそれだけで敵を一網打尽にしてしまい駆逐艦たちに活躍の場を与えられない。遠征の旗艦をやるうにも他の普通の軽巡の艦娘達に運用コストで敵わない。かといって最前線に赴けば、敵の砲撃や空襲で魚雷が誘爆して傷を負い撤退の引き金になってしまう。

しとどに降りしきる窓の外の雨が、なおさらに北上を憂鬱にさせる。

今日の昼の演習でも雷撃戦まで無事で居られたのは二回だけだった。演習にいつも自分や大井を参加させてもらえるのは感謝しているけれど、自分たちが役に立っているかはあまり自信

がない。

同室の大井は先ほどから持ち帰ってきた九三式魚雷を磨くのに余念が無い。漫然とその横顔を見つめていると、視線に気づいた大井は振り返り微笑んだ。

「魚雷の手入れ、しておいたらどうです？」

「ううん、いいや。あたしは工廠の妖精たちに任せてるから」

「駄目ですよ、最後は目でチェックしないと」

そう言う大井もそれ以上は無理にすすめてくることはない。実のところ艦装の整備は本職の妖精達に任せておけば十分であり、大井がこうして魚雷を弄るのは手持ちぶさたな時間を何とかかしようとしているに過ぎないのだろう。

……たまに、魚雷に頬ずりしたりしているのを見るとそれ以上の感情があるのでは、と疑ってしまう北上だったが。

二人だけの部屋に静けさが満ちる。

軽巡以下は同型艦で一つの部屋を分け合うのがこの鎮守府での決まりだ。重巡や軽空母でようやく二人部屋、それより上の艦艇になると本人の希望に応じて二人部屋か一人部屋になる。

そんな中で強力な武装を装備した雷巡は部屋割りについては特例で重巡や軽空母達と同じ扱いを受ける事になっている。球形の姉妹と同室で暮らしていた北上と大井は、雷巡に改装されると同時に重巡たちと同じ棟の二人部屋に移っていた。

窓の外からの雨音が大井が魚雷を磨きながらハミングする鼻歌とまざりあう。耳に心地よいその歌声を聞きながら北上は

ベッドに寝転がる。

「あつ!! 北上さん、まだ勤務時間中ですよ」

「今日の演習は全部終わったでしょ。どうせ私達の出撃は無いんだし、いいじゃん」

ごろりと寝返りを打った北上はベッドの上で腹ばいになる。

「早く甲標的、開発できるといいよねー 近代化改装はきちんとしてもらえるのはありがたいんだけど」

「そうですね」

演習でいつも戦っているお陰で魚雷の腕には大井ともども自信がある。砲撃だって威力は弱いながらも毎回きちんと命中させているし、当たり所が良ければ駆逐艦くらいは一撃だ。

だけど、そんなものは雷巡でなくたって出来る仕事だ。

やはり自分たちがいまいっぽとしないのは甲標的を持つていないからだろう。先制遠距離雷撃で格上の戦艦や正規空母を沈め、一気に戦況を有利に傾ける。それが雷巡に求められる役目では無いのだろうか。

早々に雷巡に改造してもらい、演習ですつと鍛えてもらえるのは感謝している。でも……と北上は首をひねる。

あの提督は自分たちに一体なにを期待しているんだろうか。

勤務時間の終わりを告げる放送がなる。その音が、北上の物思いを途切れさせる。

ベッドから勢いを付けて起き上がった北上は、そのまま大井の手を取る。

「大井つち、お腹減ったよね? 早く食堂行こうよ」

「ちょっとだけ待ってくれます? まだ全部、チェックし終わってなくて」

「そんなの後でいいじゃん」

磨き終えた魚雷を几帳面に机の上に並べ、大井は一つ一つ確かめている。

「本当は寮の部屋に持って来ちゃいけないから、今日中に返さないといけないですよ。北上さん、先に行って席、とつてもらえますか?」

「大井つちは本当に魚雷好きだよねー うん、わかった。先に言って待ってるから、早く来てねー」

大井を一人部屋に残して北上は食堂へ向かう。

大型艦の棟を出て構内道路をしばらく歩くと共用の食堂やらなにやらの施設がある厚生棟だ。途中で何があったのか走ってきた阿武隈と衝突しそうになるのをすんでの所でかわす。勢い余って転んだ阿武隈が何か言っていたけれど北上はあえて無視して歩き続ける。

厚生棟の玄関に入る。ここまで来ればもう少し。食堂に行くまで捕まらなければいいのだが。

「ねえ北上、魚雷のお話してー」

もう少しで食堂だったのに、訓練を終えて集団で歩いていた駆逐艦に捕まってしまった。

一人に見つけられるとわらわらと他の娘が集まってくる。

まったく、駆逐艦はこれだから。

「北上先輩、雷撃戦の話、聞かせてください」

「あつし、前にもあなた達の誰かに話したと思うんだけど」

「直接聞きたいんですよ」

魚雷での一撃に賭ける駆逐艦たちにとって自分たち雷巡はあこがれの存在であるらしい。甲標的の無い雷巡なんてそんな良いものじゃないと何度言つて聞かせようと、四十門の発射管は駆逐艦たちの曇りの無い目には輝かしく写るようだった。

軽巡から改装されたばかりのところに気まぐれから相手してやつたのが間違いだつたと後悔することもある。

気がつけば周りをすつかり駆逐艦に囲まれている。こうまてなると、あまりに素直で無邪気すぎる憧れの視線を向けてくる駆逐艦たちをむげにすることは北上には出来なかつた。

「ああもう、うざいなあ……じゃあ、この前の演習で完全勝利したときの話で良い？」

「はい!!」

「演習相手の艦隊は戦艦二隻、空母二隻、軽空母一隻、重巡一隻だつた。あつし達の艦隊は、電探で先に向こうを見つけて頭を抑えられるように回り込もうとした。そしたら……」

北上の手慣れた語りに駆逐艦たちは身を乗り出すように聞き入っている。鎮守府に新しい駆逐艦が増えるたびにこうして話をねだられていたから今ではすつかりよどみなく話せるようになってしまつていた。

索敵、艦載機との戦い、砲撃戦。順を追つて進む戦いのようすを流れるように北上は語つて聞かせる。

「金剛型の二人と、重巡たち。あの娘たちが砲撃でやり合つてくれたお陰で、あつしと大井つちはその後ろで無傷でいられた。そこで……」

「それで、それで、北上はどうしたの？」

「どうしたと思う？」

目を輝かせる駆逐艦に向かつてもつたいを付ける。

「あつし達は、うまく相手の進路を計算して、ちようど演習相手の艦隊とあつしたちの魚雷が交差するようにした」

北上の周りを囲んだ駆逐艦たちが、固唾を呑んで次の言葉を待つ。

「そこで、こう、よ」

床にしゃがみ、艤装があるつもりで九三式酸素魚雷の発射ポーズを取る。半身につき四連装が五つ、全身で合計四十発。さらに大井と二人で二倍の八十発。

狙い澄まして放たれた魚雷の網に、演習相手の戦艦二隻が誘い込まれるようにかかつていった様子を北上は思い起こす。

「一発必中の心構え」だなんて説かれるけれど実のところ魚雷はそうそう命中するものではない。お互いに高速で動いている同士で離れた距離から直進しかしない魚雷を当てるにはとても高い練度を要する。雷巡はその命中率の低さを同時発射本数を多くすることでカバーする思想だつたが、それだつて闇雲に